

## 令和7年度第1回（第12期第7回）さいたま市社会教育委員会議 会議録

開催日時：令和7年7月7日（月）10時00分～11時30分

開催場所：ときわ会館5階小ホール

出席者名：【委 員】若原 幸範議長、石川 敬史副議長、石崎 敬吾委員、  
井上 久雄委員、加藤 美幸委員、佐野 操委員、  
澁谷 知範委員、関根 広美委員、吉川 洋一委員、  
吉沢 浩之委員

【事務局】（生涯学習部） 深津 健太郎  
（生涯学習振興課）八島 典子、玉城 伸、柳田 正明、  
山本 直子、片山 貴仁、三村 悟、  
伊藤 智美、駒井 友里香  
(生涯学習総合センター) 大城 冬樹  
(資料サービス課) 大橋 義武

欠席者名：今川 夏如委員、小林 玲子委員、鶴ヶ谷 栄子委員、林 弘樹委員、  
藤田 成司委員

公開・非公開の別：公開

傍聴人の数：1人

### 1 開 会

### 2 挨 捶

### 3 議 事

#### (1) 報告事項 前回会議について

令和6年度第4回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

#### (2) 協議事項

##### ア 令和7年度 社会教育関係団体補助金について

令和7年度の社会教育関係団体補助金について資料1に基づき説明し、意見を聴取した。

##### 【意見・質疑応答】

###### <議長>

今年度の補助申請額は昨年度と同じ165万円という説明だったが、1ページの令和6年度の補助金額は100万474円になっているのは、使い切らずに戻しがあったということ。

###### <事務局>

令和6年度交付額が減少しているのは、広報紙をオンライン化したためである。しかし、閲覧者が少なく、令和7年度は印刷して配布することにした。そのため、今年

度は年2回各9.5万部発行予定で予算計上している。また、千葉市で9月に開催される、指定都市大会に参加する費用を合わせると補助金額が165万円見込まれると確認している。

＜関根委員＞

収支予算書支出の部 特別事業費のガイドブックとは何か。

＜事務局＞

PTAガイドブックというもので例えば入会については任意であることとか、会費の集め方などを学校・保護者向けに、市PTA協が作っているガイドブックである。

＜吉沢委員＞

事業計画(案)の館岩少年自然の家で行われる親子の集いは研修になるのか。毎年何組ぐらい参加しているのかということと、学校で実施している林間学校と対象が被っていないのか。

＜事務局＞

調べて後ほど回答する。

(回答)

先ほど館岩少年自然の家について質問があった。この事業はPTAが子供たちを募つて、現地に連れて行くものではない。今ホームページに掲載されているが、館岩少年自然の家が20家族80名程度の規模で、7月26日から28日まで行う行事の運営を支援するために、市PTAからスタッフを何名か派遣するという費用である。予算に100万円を積んであるが、これはその他の事業も含んでおり、実際この館岩少年自然の家の事業に係るものとしては、交通費その他で少額になる。

＜加藤委員＞

事業計画(案)で9月に役員セミナーと、祝賀懇親会があるが、飲食は補助金の対象としないということなので、祝賀懇親会の費用は、補助金の対象の事業ではないということか。また、収支予算書で広報紙の250万と研究大会参加費の30万を合わせると280万になる。この一部分が補助金に該当してくるということなのか。

指定都市大会の千葉大会に参加するのに、30万は高額に思う。参加人数が多いということか。

＜事務局＞

実際にかかった経費については、領収書を全部提出いただいて、生涯学習振興課が1枚1枚精査をして飲食にかかるものなどの対象外の経費を全て除外している。指定都市の大会の参加費については、予算書に30万円載っているが、何人参加したかなど領収書を全部精査する。

## イ 第11期さいたま市社会教育委員会議提言概要について

前回までに出た委員からの意見を基に、社会教育委員会議議長が執筆した提言概要を議長より説明した。

### 【意見・質疑応答】

#### ＜瀧谷委員＞

多岐にわたる議論や意見などをわかりやすく整理いただきており、感謝申し上げる。その上で、働く世代の学習活動と地域活動の橋渡しという観点から追加された2つのキーワードに関して、私から2点、発言をさせていただく。

第一に、「コーディネーターとしての社会教育職員」についてである。前回の会議でも話が出たが、社会教育職員の担う役割は極めて重要である。一方で、コーディネーターの役割を担うのは社会教育職員のみに限定されるものではなく、「共」の領域の主体である市民や、近年制度化された社会教育士、生涯学習コーディネーターなど、幅広く市民ボランティアが同様の役割を担っていると認識している。具体的な事例として、生涯学習総合センターでは「えらベル」という市民団体が15年以上にわたり、他の公民館や社会教育施設で活動している団体やサークルの主催者を紹介していく、コーディネーターの役割を担っている。こうした市民の活躍も重要なコーディネーターと思っている。社会教育職員を通じた市民ボランティアとの連携などは不可欠であるが、「共」の領域を担うアクターとして、市民を明確に位置付ける表現が追加されるとよいと思う。

第二に、「継続と段階的発展の重要性」についてである。前々回の中教審生涯学習分科会の資料に、障害者や外国にルーツを持つ方への個別のニーズへの配慮も重要なキーワードとして挙げられていたと記憶している。今回、「働く世代」を広義に捉えているため、こうした観点も包含されているとは思われるが、学びのステップアップの仕組みは、それぞれの立場に応じた個別のニーズに基づいたものであることが理想である。一律的な制度設計ではないという意味でも、「個別のニーズ」といった視点を明示的に取り入れるとよりよくなると考える。

#### ＜議長＞

まず1点目、4ページ目3の②は、一応プロフェッショナル、職業としてのコーディネーターということで社会教育職員を位置付けている。しかし、確かにおっしゃる通り近年、社会教育士が広がっていて、職業としてのプロフェッショナル以外にも市民セクターとして行っている方がいらっしゃるので、プロフェッショナルとの連携も含めて、広げて書くようにしたい。

それから障害のある方や外国にルーツのある方の個別ニーズはとても大事なことなのでどこかに書きたいと思っているが、どこに位置付けていくかというところを少し悩んでいる。「2 働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」で、その地域活動なり地域をつくっていく時に個別のニーズにどのように対応していくか考えていきたいので、そこに書くことでよいかと悩んでいたところだ。委員のおっしゃるとおり大

事な点なのでどこかに盛り込んで書いていきたい。

＜副議長＞

若原議長にまとめていただき、素晴らしいまとめであり、皆さんこれまでの意見が十分反映されている内容だなと思った。それぞれ大項目で1、2、3というふうに作っており、重複している部分や、どういうふうに区切っていくのかを、非常に悩まれたという話があった。資料2の2枚目の⑤キーワードで、「a. 学習者としての生涯学習」が1、「b. 人と人を結びつける「つながり」」が1というように論点整理をされていると思う。「1 働く世代が生涯学習を身近に感じるきっかけづくり」のキーワードaとbが、どちらかというと「私」という個人から出発をしていきながら「私」の自己実現をどう図っていくのか。同時に「私」というのは、社会の中、地域社会の中での「私」という存在の捉え返しが、この1のところに位置付けられるのかなと思った。

そうすると「2 働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」で、地域活動に繋がる場という捉え返しをすることは、地域社会の参画に結びついていくというストーリーが見えるように思った。

最後の「3 働く世代の生涯学習と、地域活動への橋渡し（まとめ）」のところで、濵谷委員のご発言もありましたが、例えば、教育基本法とか、社会教育法の中で、あらゆる機会、あらゆる場所での学びという論点で広くストーリー展開をしていくとこの提言というものが見えてくる。そのようなストーリーが、展開できると思った。

最後に先ほどの「2 働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」で、この会議やワークショップなどの中で、学校とか、子供とかというような視点があったと思う。例えば子供や、学校、保育園などを媒介としながら、大人の学び、働く世代の学び、つまり私達働く世代も、児童生徒と共に学び合うというような、学びの共同体という視点がどこかにあるといいと思った。

＜議長＞

まさに私が意図していたところをしっかりと整理していただき、私の頭の整理になった。最後に、学校や子供についてこの場でもたくさん議論してきたし、大事なところだと思うのでしっかりと書いていきたい。

「2 働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」の中に入ってくるかと思う。問題意識として初めのほうに書いたが、働く世代、現役世代を中心としながらも将来世代とのつながりや、将来世代と共に学び合う関係は重要だというのもまさにその通りだと思う。具体例も含めてワークショップで扱った例を踏まえながら、具体的に書ければいいと思う。

＜加藤委員＞

整理をしていただいて、とてもわかりやすくなったと思う。1ページ目の①「働く世代」の範囲については、厳格に区切らないで広くというように記述してあるが、実

際に、高齢化が進んできて、定年も延長になり、実際の働く時間も、長くなっていることもどこかに加えていくと良いと思う。

②「働く世代」の捉え方で、「生涯学習ビジョン」と結びつけて、「個の成長」、「まちの成長」と成長で揃えてあつたと思うので、「何々の成長」で揃えて書くと、よりビジョンと繋がっていくと思う。

2ページ「1 働く世代が生涯学習を身近に感じるきっかけづくり」①課題で、「生涯学習」という言葉にハードルを感じるとあるが、おそらく「生涯学習」は暇な高齢者がやるものというようなネガティブなお考えの人もそこそこのので、そういったことも書いていただいたらと良いと思う。また、自分が行っていることが生涯学習であるという理解が進んでないという点がまだまだあると思うので、そういったことも挙げていただくと良いと思う。あと②内容のところの「時間がない」や、「行くのが面倒くさい」と感じる方も多い。オンラインも出てきたので、行かなくて也能するような、web媒体を活用したものを加えていただくと良いと思う。

あと3ページの「学ぶ側」から「教える側」、これがすごくハードルが高いと思うが、公民館等では、市民企画講座をたくさんやられているので、そのような事例を挙げていただくと良いと思う。

「2 働く世代が地域活動につながる仕組みづくり」について、②内容になるのかと思うが、さいたま市、特に浦和の辺りは、この季節は自治会単位で祭りをやっているし、市の神輿のまつりがあり、若い人がすごくたくさん参加している。ただ祭りに参加しているのではなくて、祭りに参加すること自体が地域おこしにもつながるし、それ自体が働く世代の活動なのだということもあると思う。加えて、「公民館まつり」もまつりの一つで子供からお年寄りまでみんな来て楽しめるので、事例になるのかわかりませんが、載せていただければと思う。

最後に4ページで、先ほど瀧谷委員からもあったように、コーディネーターは、社会教育職員、例えば社会教育主事も、さいたま市は公民館に配置されているが、なかなか力が発揮できていない部分があるので、社会教育職員について何か提言できると良いと思った。また、社会教育士もできて、市民のコーディネート力をもっと上げていく必要があるので、何か未来への展望みたいなことで書かれると良いと思う。「①継続と段階的発展の重要性」では、続くとか続けられるというのは、生涯学習を行つて仲間ができたから、楽しそうだから仲間同士でもっと違うことをやろうとか、仲間ができたから、辞めずにもうちょっと続けてみようかというのもあると思うので、仲間関係のことを少し入れていただくと良いのかなと思った。

＜議長＞

最後のコーディネーターについて、先ほども瀧谷委員からあった通り、もちろん社会教育職員だけではなくより広く取っていきたい。一方で、行政への提言としてはこの社会教育職員を表にして提言していきたいとあえてキーワードとしてあげている。その上で先ほどの通り、市民セクターとの連携や、社会教育を通してコーディネーターをたくさん地域の中で育てていくということもあると思うので、そこは意図してまとめていきたい。

### ＜佐野委員＞

子育て世代のことが内容的に少ないように思う。加藤委員のお話の中で祭りという視点があったが、私自身がお囃子をやっていて地域のお祭りに深く関わっている。今年度はものすごい人数の子供たちが、そういった祭りに参加してくれた。というのは、この暑さの中で時期をずらした。いつも7月の第2週の週末にやっていたが、6月の頭にしたところ、今までにないぐらいの子供たちの参加があった。また、小学校で祭りを取り上げた授業をしてくださったおかげで、その学年のお子さんも含めて保護者の人も来てくださった。地域のダンスチーム等を集めて発表する場を、祭りの前日の夜の宵宮で行って、1,000人以上の子供たちが集まってきた。私は放課後児童クラブの仕事をしているが、そこに来た青年が祭りで神輿を担いでいて声をかけてくれた。私の児童クラブにいたお子さんが神輿を担いだり、中学校とも連携して、中学生もボランティアとして神輿を担いだりということも行われ、学校や学校教育の中で地域の特性を生かしたり、チャレンジスクールも含めてそういう流れがあったりして、いいなあと思った。またボランティアに参加した中学生たちが、大人になって親になったときに、子供と一緒に祭りに参加したり、神輿を担いでくれたりというようにならっていいくだろうという未来が想像できるようなきっかけを、学校教育の場と、地域が連携してつくっていて、素敵だなと思った。

### ＜議長＞

祭りの機能にはそういう側面もあると思う。普段意識されていない地域というものが表に現れてくるのは祭りだと思う。皆さんも楽しみながら参加して、顔を合わせることもあるので、社会教育を考える上でお祭りはとても大事にされてきたものだと思う。改めて今ここで重視するということが重要なと思う。コロナで一旦終わってしまいなかなか再開できないという例もあるが、うちの自治会は今年から再開するが、こういう時期でもあるので改めて提言の中で示すのが大事である。

## 【総括】

### ＜副議長＞

委員の皆さんのお話を伺って、こういった提言を社会教育委員会議で出すことによって、この提言を実現していくための道のりやプロセスや、具体的な打ち手っていうのが、これから求められていくのではないか。そうすると、市の社会教育行政や市の関係機関がどのように予算をつけて事業化していくのか。提言だけで終わらせるのではなく、具体的にどう実行していくのかという視点が短期的、もしくは長期的に、求められていく。

お祭りの話もあったが、私は図書館学の領域を研究しているが、地域の文化資源は私達が地域社会で生きていく、アイデンティティーとか自負を形成するのに非常に密接であると思った。さいたま市の場合は非常に広い市域で、転入転出の人口が非常に多いと伺っているが、さいたま市というよりも、自分たちで生きて地域社会、字というように考えるといいと思うが、小学校区とか中学校区の中などの文化資源、お祭

りをはじめ様々な伝統行事などというのも、社会教育の学びという中に組み込むことができると思った。この参加や参画、そして地域社会で生きていく「私」という捉え返しというのが、今回でいろいろ感じたところである。

#### <議長>

大変貴重な意見をたくさんいただいたので、これを踏まえてどう文章化するのか、ちょっと今頭がいっぱいである。この「働く世代の生涯学習、社会教育」というのは非常に挑戦的なテーマだったと思う。これまでの社会教育の歴史を見ても働く世代、子育て世代ということではそれなりの蓄積はあるが、働いている、就労している方のニーズにどう応えていくのかはなかなか難しい論点であり、今回あえてそこにチャレンジすることで意義のある議論ができたと思っている。「議論を踏まえて意見を反映させた提言書をしっかりと作っていきたいと思うので、ご期待ください。」となかなか言えないが頑張るので、提言書ができたらぜひご意見をお出しitただければと思う。

#### 4 連絡事項

さいたま市生涯学習フェスティバル、さいたま市生涯学習学びのネットワーク、さいたま市生涯学習ガイドブック、全国社会教育研究大会について事務局より説明した。

#### 5 閉 会

以上